

建築精神か小商人性か？

建築精神か小商人性か？

Baugeist oder Krämerium ?

ヴァルター・グロピウス

Walter Gropius

貞 包 博 幸・訳

Hiroyuki Sadakane

は し が き

1919年4月、ヴァイマールにバウハウスを創設したグロピウスの初期の文献としては、1914年までの戦前期に4編、大戦直後の1919年にバウハウス宣言文を含め3編のものがある。いずれも、20世紀初頭における近代建築の先駆者・指導者であった彼の当時の建築思想を知るための貴重な資料となっている。そうした初期の資料のうちでも、とりわけここに訳出した「Baugeist Oder Krämerium ?」は、バウハウス設立と同じ年の1919年の夏、ヴァイマールに近い都市ライプチヒにおいて、実業家・産業家を前に彼がおこなった演説を、同年10月、雑誌「Schuhwelt」に掲載したものであるため、バウハウス創設期の時代背景やこの期のグロピウスの造形思想を考察するうえに不可欠なものである。

従来、初期バウハウスの傾向としては、表現主義的とみる解釈が一般におこなわれ、工業や機械の否定の側に立つものとされてきた。たしかに、宣言文の表紙をかざったりオーネル・ファイニンガーの聖堂の木版画、1921年作のグロピウスの「モニュメント」等は表現主義の作風であるし、またなによりも、宣言文がハントヴェルクを強調し、諸芸術総合の理念を表明するなど全体として幻想的、ユートピア的な未来を志向する表現主義的な内容を基調としたものであった。そしてまた、宣言文は、戦前戦中からの多くの表現主義の作家が参加し、大戦直後の1918年に結成された「芸術労働評議会」の綱領と、内容においてきわめて類似した側面をもっている。こうした点を考えると、創設初期のバウハウスの傾向が、とりわけ1913年に結成された「デア・シュトゥルム」からはじまるドイツ表現主義運動の系譜のなかに位置づけられ、解釈されてきたのにはそれなりの妥当性があるろう。

しかしながら、本論は、バウハウス宣言文と同じように、未来のカテドラルの建設について言及するなど表現主義の芸術思潮を述べながらも、他方では、工業製品の品質という、戦前期のドイツ工作連盟の主要テーマを再び取りあげており、グロピウスがバウハウス創設初期においてもなお、機械文明時代の工業への指向を戦前期と同じように堅持しつづけていたことをはっきり示している。したがって、初期バウハウスの教育目的や指導理念については、その宣言文や綱領に表明された内容からのみ解釈することは片手落ちとなろうし、それには本論の内容を補完することが是非とも必要であろう。

人が重い病気を克服しなければならないとしたら、そのなかで、彼は痛みと苦悩とを通して、より高い見識へ、より高い倫理的段階へ到達するものだ。ドイツは、今日そうした状態にある。失敗は、もはや隣人のなかに責任者を求めるのではなく、まず自分自身の頭の上のハエを追う方向へと、見識ある人々を導いた。こうした理性的な見識と、責任をいつも自分自身のなかに求める自己への厳しさとは、実り豊かな精神状態であり、かかる雰囲気から、新しい生産的構築の芽が生まれうるのである。

われわれは、なるほど戦前のドイツにおいて、おそらく他の諸外国以上のものを創造したであろうが、われわれの仕事は、その大部分が非本質的な目的、つまり金もうけに、精神生活の豊かさのかわりに、物質的生活の豊かさへと向けられた。悪意からではないにしても、われわれはこのことをさほどよく認識していなかった。しかし、こうしてドイツ人は、自己のうちに最上のもの、すなわち精神的沈潜を失い、英国人がもっているような社交家の才覚をもたないまま、きわめて浅薄な社交家、ビジネスマンとなった。こうした一般的な浅薄化の原因は、もっともわが国だけに存在するものではなく、多かれ少なかれ全ての文明諸国に認められるものだが、おそらく今日誰も、その原因を確信をもってあげることはできないだろう。それは時流なのである。宗教的統一思考が漸次衰微したことによって、一般大衆の倫理的基盤は、まさに崩壊した。だが同程度に、造形力、就業国民の形式的、創造的構築力は衰え、商業精神が、全ての社会階層や身分層に著しく増大した。そしてついに、それは真の確かな商人魂を危険にさらす高利貸的小商人主義に墮落してしまった。個々人の責任感や、自己の仕事に対する深い愛はますます鈍化し、生きた個性はグロテスクさを増す生命のない組織の迷宮のなかで自己を失い、美的感情や心のやさしさの衰退に代わって、あの宿命的な権力と物質の崇拜が台頭した。それは、精神的な奈落以上に、経済的奈落へわれわれを導くにちがいない。なぜなら、精神的なものも物質化されたからである。知識の集積が、あやまって教育とみなされ、真の精神教育の価値は下がってしまった。ところが、知識のがらくたものや無用の知識とともに、とりわけ、ヨーロッパの高慢さというもっとも危険なヨーロッパの病状が果てしなくふくれあがった。一見して明らかなように、今日われわれは、われわれヨーロッパの儀装キリスト教の頽廢の前に、眩惑するにちがいない。畏敬心のない高尚気どりのヨーロッパ人は、現代や過去のあらゆる世界問題について、大上段から高慢な判断をくだしている。しかし、いったい、われわれ固有の文明生活のどこに、世界をわれわれの尺度でもってのみ測ることを正当とするような、なお強固な文化的生活形式を見出すことができるのだろうか。たとえば、われわれが素朴にすばらしいと思う質素なインド人や中国人の、慣習や象徴にきわめて富んだ伝記に較べるとき、われわれの古くさいすべての教育や無秩序なヨーロッパ的な文化価値のうちに、何がお残っているだろうか。われわれヨーロッパ人の思惟能力や知性主義によって踏みにじられた感情は、もはや敬けんなアスターテン（Astaten）の精神的深さを感じとるのには、まったく不充分であることを認めなければならない。あの、人間らしい謙虚さの欠如が、まさに冷静な認識を妨げたし、そのことが、精神的な繁栄の代わりに、外面的生活の多くの有用かつ快適な事物を、われわれの裕福、われわれの技術、われわれの商業の繁栄を、誤って文化の目的とみなさせたのである。量がわれわれを支配し、そして人間のうちに、もっぱら繊細で深遠な芸術精神を生む質は滅んでしまった。いま、質に対する感覚や真の精神教育を妨げたすべての特色を要約するならば、それは、各階層の精神的 content のない人々について、われわれが小商人魂と呼ぶのと同じ意味で、小商人性という言葉で特徴づけられるであろう。たとえ、そこに気高い商人階級への

非難が表現されていないとしても、そうやってよいだろう。しかし今日、文明国民の全般にまさにかような精神的豊かさが欠けているのだ。それゆえ、このような小商人性の支配のもとでは、ヨーロッパにいかなる文化も成立しえなかったし、それとは反対に、形式破壊力が戦争や革命を伴ったのである。したがって、一階層だけではなく、国民全体によるその克服が、新しい文化構築の不可欠な前提なのである。賢明な同時代人であり、中国の政治家・学者であるクー・フン・ミン（Ku Hung Ming）は、1916年ドイツで出版したその著「中国国民の精神と戦争からの脱出」において、こうした考えを次のように述べている。

人々は、ドイツの軍国主義は現代世界の敵であり、危険であるという。しかし私はいう。互いに結合して商業主義を生むものは「われわれすべての者に内在する利己心と卑きょうである」と。すべての諸国、とりわけ大英帝国やアメリカの、こうした商業主義の精神が、現代世界の、真の最大の敵であり、プロイセンの軍国主義は決してそうではないのだ。なぜなら、商業主義、すなわち利己心と卑きょうとの結合は、大英帝国においては民族崇拜の宗教を形成したが、ドイツでは、それは、権力崇拜の宗教、すなわちついにこの大戦へと導いていったドイツ軍国主義の原因となったものなのである。それゆえ、軍国主義ではなくて、商業主義が当大戦の源泉なのである。したがって、われわれが助けようと思うなら、われわれが、われわれのすべてが、何よりもまず、利己心と卑きょうとの結合を、われわれのうちにある商業主義の精神を克服しなければならぬ。単的にいえば、われわれは利得についてではなく、正義について考えなければならぬのである。

したがって、こうした商業主義あるいは小商人性の克服には、われわれにとって、人間全般の変革、根本から新たに変革した精神的世界観が是非とも必要であろう。しかし、それには十分な時間が必要である。ところが、わが国民の気質は、不幸にみまわれたことによってすでにぐらつき、古い生活の挫折によって、他のヨーロッパ国民と同じように、新しい精神をよりすみやかに受け入れるだろうと思えるほど、きわめて感じやすい状態に陥っているのだ。なぜなら、戦争、飢餓、ペストなどがわれわれの頑迷さをほぐし、考えることのきらいな者や不精者を目覚めさせ、ものうげで怠惰な心に再び刺激をあたえたからであった。われわれは苦悩を通して新しい感受性を学んだ。しかし、確かに感受性は暗示や発見、創造的造形力、単的にいえば、広義の形成欲、建築欲の源泉なのである。そして、こうした建築や造形、つまり建築精神への意欲は、いうまでもなく、小商人性や解体精神の対極をなすものである。したがって、われわれは芸術家と同様に商人にも、むろん全国民にも、その建築精神を心から奨励しなければならない。

それは、文化的な夜明けへの倫理的前提なのである。われわれは、すべての仕事を最終的に成し遂げるためには、それを認識しておかなければならない。しかし、そうした精神的認識によって、小商人性の芽がつぶされ、建築精神への願いが新たに芽生えるならば、そのとき始めて、われわれの時代をそのような目的へ導きうる現実の第一歩が自ずと踏み出されることになるだろう。

数十年来、芸術・手工作・工業の統一が達成できるような気運が生まれた。英国のラスキン、ウィリアム・モリス、それにヴァン・ド・ヴェルド、ペーター・ベーレンスといった強烈な個性の人々や、とりわけドイツ工作連盟も、工芸や工業の製品向上を旗印として掲げた。しかし、ヨーロッパの小商人性は、徹底した成果を妨げた。今日この問題が新たに燃えあがってきた。しかし、われわれは現在、かつて以上に敵をより良く認識しているし、どうにもならない時代

の現実によって、各自は質向上が不可欠であるとの認識をすでにもっている。だが、われわれは新しい仕事を始める前に、新たにその目的をはっきり定めなければならない。多くの場合、こうした明確さが求められるべきである。混沌の真っ只中で、われわれ自身について自覚しはじめた今日も、多くの場合、われわれは、戦争へわれわれを投げ込んだ悲惨から脱出するために仕事を始めなければならないということだけが論じられている。しかし、われわれは、直ちに良き仕事が成し遂げられなければならぬことを随所で叫ぶべきであろう。良き仕事とは、すなわち、わが国に所有するかあるいは最終目標の金貨のために外国から輸入する、それぞれの原材料が、手工作あるいは工業の品質を高める仕事、とりわけ模倣のない形式的特色によって、何倍もの価値に高められなければならない、ということである。したがって、購買力の衰退結果である原材輸入量の衰退を、再び輸出さるべき既製品の品質向上によって、漸次回復させるよう試みなければならない。この目的を達成するにふさわしい手段は次のとおりである。

1. 無学労働者層や、商業の衰退によって自ずと自由になる小商人、さらに手工作や工業専門労働のためのあらゆる種類の従業員などの再確保。
2. 工業主や広範囲の大衆の側における代用品・粗悪品に対する徹底的啓蒙。国民の側の新しい製作意識の覚醒。
3. 造形芸術家—建築家、彫刻家、画家—の手工作における基礎教育。

今日、各人は自己の活動領域で、こうした実際的要求の実現に着手することができる。というのは、より良い状況をひき起こし、これ以上の幻想にふけらないためには、自分自身でやる以外どうにもならないからだ、組織は人から個人作業を奪うかもしれないからだ。すなわち、組織というものはせいぜい良くても、単に、生きた自己目的のない機械の補助手段でしかないからである。もっとも強い影響は人から人へのものなのである。それゆえ、労働組合や工場の労働者のもとでの啓蒙は、とりわけ著名な幾人かの人々が、労働者のもとで、個人的に口から口へ説得することに成功した場合にのみ、もっとも大きい成果を見込めるであろう。これらの人々は、内的な理解が得られさえすれば、同輩のもとで、その理念の普及のための精神的パイオニアとして、自らに気をくばるものだ。上述の第一要求、すなわち手工作および工業専門労働への無学の組織労働者の緊急不可欠な再確保にとっても、こうした方法のみが、きつと成功を約束するだろう。このことは、同僚以上のより高い技倆修得の努力を押しすすめる労働者にとっては、残念ながらも存在するボイコットの危険性を考慮しても、そうである。外部からの強制は無意味であろう。このような無学の労働者が、新しい製作階級の主要部分とならなければならないが、商業の衰退によって自由となった一連の小商人や、あらゆる業種の従業員からも、就業者の数は増大することになるだろう。さし迫った状況が、こうした急変をもたらすであろう。ある種の手工家階級は、平和状況に直面して、今日すでにまさしく数が増大している。文化的にみて、そこには初めての有望な前進がみられるにちがいない。なぜなら、こうした手工労働の増大は、あの造形意欲、あの生き生きとした建築精神を意味しており、これらのものの一般的普及がなければ、文化などとうてい考えられないからである。戦前では、小規模の手工マイスターの数は減少し、多くは商人となった。今日、たとえば、人がこわれた懐中時計を時計製造者のところへ持って行ったとしても、その時計製造者は、時計を自分の手で修理することはまれであろう。彼は、その時計を中央工場へ送る。したがって、時計製造者は時計商人となったのであり、工場は店となった。かつての無数の手工家が、過去幾世代のうちに、ヨー

ロッパの精神喪失のきざしとなった安易な金もうけへあきらかに熱狂してしまったことにより、手工階級から去ってしまった。彼らは、いまや自己の造形能力は遊ばせたままとなったが、だからといって、多くの場合、責任の重い専門的商人業に対しては才覚も素養もなく不適格であった。いま、この対極をなすものが、オリエントのバザール街である。手工家は、販売所の戸の前に座り、働いている。もし、来客が商品の値段を尋ねれば、彼らは、ただ不機嫌に、そして退屈そうに答える。なぜなら、彼らは自分の仕事に没頭しているし、仕事の邪魔はされたくないし、それにまた、いやいやながら自分の熟練作業から離れることになるからだ。金もうけ、すなわち販売は彼らにとっては、単に必要悪でしかないのだ。

第二の要求は次のとおりである。工場主や広範囲の大衆の側における代用品・粗悪品に対する徹底的啓蒙。国民の側の新しい製作意識の覚醒。

われわれは、われわれの個人的需要を質に向けたならば、そのとき始めて、広い範囲にわたって優秀な品質の必需品を生産できるのだ。近い将来の原材料不足は、おそらくこうした要求を必然的に支えることになるだろう。なぜなら、われわれが所有するわずかな素材は、手工家・工場主にとって高価なものであろうし、同様に大衆にとっても高価なので、それはわれわれが過剰ななかにひたっていた以前よりも、より一層大事に取りあつかわれるからである。ドイツでは、前述した戦前期の堅実な趣味を高める真剣な努力にもかかわらず、安物の売買がとどまることなく拡がっていた。その結果、ドイツの粗悪品への悪評が、世界市場において、いまもなお残っている。外国での販路拡大による安易な利潤は、われわれを製品の強化・向上から引き離れたし、良心的な少数者の活動を遅らせた。しかし、今日その状況は根本的に変わってしまった。われわれは、さし迫った状況から、手工作・工業のいたるところで一その状況が存在するかぎり一品質を高めざるをえなくなるだろう。われわれの敵は、大量生産品の輸出を故意にはばむすべを知っているだろう。したがって、外国との競争は、前例のない技術的製品や、精魂のこもった造形によって、まさしく模倣のできない、それゆえに需要が多く競争がなくなる商品でもってのみ可能なのである。しかし、そうした製品を輸出しうするためには、われわれもまた、われわれ個人の需要を、そうした製品に適合させなければならないことは明らかである。なぜなら、国はもっぱら高品質の商品を輸出するが、自国の需要は、粗悪品や代用品で満たすということは、文化的にいて不可能なことだからである。しかし、ここには最大の障害があろう。というのは、ドイツの大衆は、いまなお趣味の点では殆ど教育されていないし、まず第一に、貧困のためにも、個々人は、貧困とは裏腹に増大し高まりつつある美しい環境への願望を満たしえないだろうからだ。そうした待望の発展は精神的な理解やさし迫った状況から生まれたものだが、それは相互に望まれるようになれば、うまくゆくものである。それは、われわれが未来の文化に対し役割を果たしさえすれば、やってくるにちがいないものなのだ。手工家や芸術家のあいだに、高慢な壁を築こうとした、階級差別的な自負のない工作者の新しい組合をつくろうではないか！芸術家、手工家、工場主および大衆は互いに手を差しのべあわなければならない。個々人は、あるいは起こりうる最初の失敗を辛抱強く克服し、また随所で、直接的ではないにせよ、給与の支払いにあらわれる犠牲をあえて払う準備をしておかなければならない。だが、何よりもまず、理解を増すことによって、自分を押し通そうとする職業グループのあいだの不信が取り除かれなければならない。工場主が、芸術家をしばしば見くびったりするように、芸術家は、手工家と工業とのあいだに過度の対立をみないよう、ふたたび注意

しなければならない。工業は将来においても、たとえ形は変わっても、不可欠なものであろう。したがって、われわれは機械の造形的特色と真剣に取り組まなければならない。しかし、代用品の汚名は、まさに芸術家の協力によって、機械製品から消えうせるにちがいない。戦前から、すでに商業や工業の全領域において、技術的・経済的完成へのこれまでの要求とならび、外面形式の美への要求が生まれていた。国際競争に勝つためには、もはや製品の物質的改善だけでは、あきらかに不充分である。技術的にはどの点でも同等にすぐれた物は、精神的理念や形式がみなぎっていなければならないだろうし、それによって、多数の同種の製品のもとで優先権が保証されるのである。工場主は、機械製品に、機械生産の特色とともに、可能なかぎり、製品のすばらしい特徴についても、さらに一層そなえさせようと考えてきた。しかし、こうした考慮のすべてが、精神的なものよりも、むしろ経済的な配慮から生じたものであったため、われわれは目的に到達しなかった。このことは、われわれが現在あるさし迫った状況によってのみ、どうにかなるだろう。今日、工場主はもはや芸術家の仕事をぜいたくとはみなしていないだろうし、商人・技術者は、芸術家との共同作業を求めるだろう。というのは、芸術家は機械の生命のない製品に魂を吹き込む能力をそなえているからである。芸術家の創造力は、このところで生き生きと生きつづけるのだ。彼の共同作業はぜい沢ではなく、善意の付けたしでもない。それはわれわれの製品の不可欠な構成要素となろう。人はなお、美的な問題にはほとんど不慣れた工場主に対し、物質的にはさしあたりその素性をあかさない芸術力の価値を過少評価しがちである。わずかな月給に対し一日八時間を自主的に、そしておおくは十分な下準備もなしに芸術を生み出さなければならない図案家を雇うこと、さらにまた彼らの大なり小なり気のぬけた図案を、多くの製品にし、世界に普及させることだけでは不充分なのだ。芸術性に富んだ図案の入手は容易なことではないのだ。技術的な発明や商業の管理には自主的な頭脳を持ち主が必要であるように、新しい精神の込められた形式的表現の発明には、すぐれた芸術力、芸術的個性が必要なのである。だが、今日の状況からみると、われわれは建築精神をもちあわせていないし、われわれの精神的分裂の結果、固有の有効な形式をもたないのである。その結果、われわれはおびただしい無味乾燥な注入物で着古した過去の様式形態を絶えずむさぼっているのだ。個々人のすぐれた成果をもってしても、こうした認識を取り払うことはできないのである。それゆえ、われわれは様式模倣で前進するのではなく、まさにわれわれ自身の時代にふさわしい、最上のよく熟考された形式理念のみが、手工作や工業の複製にあたって、個々人に対してのみならず、大衆全般に対しても十分役立ちうるのである。工場主が芸術家に対する経費を節約しようと信じるならば、それは近視眼的なものであるということが実際にはすでに明らかとなっている。指導的な企業は次の点を証明している。もし彼らが、技術的完成や買い得といった点とならんで、製品の芸術的な形式価値に対しても心を配り、それをもって民衆に趣味を付与するならば、長期的には引き合うということである。むろん、こうした問題においては、より高い収益への見通しがイニシアティブを取ってはならない。イニシアティブを取るのは、精神的必然性、広がりつつある建築意欲だけであり、利欲ではないのだ。社会全般の精神的強化の進展にともなって、まさに必然的に、責任感や美への願いが個々人のうちに再び高まるであろう。不真面目な者は、より賢明な隣人の道徳上の実例によって軽べつされるようになるだろう。そしてついに、どんな精神のこもった組織ですら、影響力の点ではそれにとって代わることができないほどの、倫理上のボイコットが、人から人へと生じることになる。

第3の要求は次のとおりである。造形芸術家の手工作における基礎教育。

芸術、手工作、工業はそれらの本質に従えば、本来、相互依存的なものだが、さまざまな壁によって今日なお、互いに強固に分離されたままとなっている。それゆえ、手工作と工業とは硬直化した形態を解きほぐし、それを生き生きと新しく造形できる芸術的造形力を新たに注入することが必要である。これに対し、芸術家には、もっぱら素材、原料を最高に造形しうようになるための手工作の基礎が欠けている。歴史上のすぐれた文化時代には、芸術と手工作とのあいだの境界は十分に解消されていたので、本質的に、各手工作家は芸術家であり、各芸術家は手工作家であった。すべての国民が建築し造形した。そして、このことが国民の至高の活動であったし、商業を営むことは、第2義的なことであった。ドイツでは、たとえばゴシックの最盛期がそうであった。今日、われわれにはメルヘンのように見えるゴシック教会堂の驚異は、国民全体によって、すなわちあらゆる階層の手工家から、いわゆるバウヒュッテに結集した大製作集団によって築かれたものであった。このバウヒュッテでは各人が芸術家であり、各人が手工家であった。われわれは再び、こうした目標を目指して努力しなければならないのだ。芸術家と手工家とはまったくの同一物であり、彼らはともにひとつの全体をなしている。われわれがこれまでに信じてきたような特殊領域としての美術手工、あるいは美術工芸といったものはないのである。手工作が、まがいのない技倆として、あるいはますます創意的かつ創造的に営まれるかどうかは、手工家の個性いかにかかっているのだ。これは天与の才能であり教えることのできないものだが、堅実な手工能力は教えられるし、それはそれぞれの造形活動の不可欠の基礎なのである（パートニング）。しかし、芸術家と手工家とのあいだに本質的な違いがないこと、したがって、芸術家は手工家が向上したものでしかないことが認められるならば、将来、すべての建築家、彫刻家、画家、素描家、工芸家は手工作を学ぶ義務を負わなければならないという要求が必然的に生まれてくる。美術学校の統一問題は、その計画にあたっては、学校みtainなものではなく、純粋な工房経営に、たとえば国立工場風のものに力点がおおかれているものの、それは役人や芸術家仲間の心をかきたてている。若者は熱烈にこうした変革を求めているのだ。事実、この緊急の問題にはドイツ国民全体が取り組んでいる。あらゆる階層から国に対し公然と向けられるこうした要求が強ければ強いほど、われわれが戦い取ろうとするものはそれだけ早く実現するだろう。戦前期の世代はもはや根本から態度を変えることはできないが、若者はそれができる。若者は建築精神へ導く新しい工作精神の担い手なのだ。したがって、国家—そしてわれわれもまた国家の一部なのだ—は、ためらわずにこうした重要問題の解決に断乎として立ちむかわなければならない。そして芸術学校を教育工房に変えなければならない。

国立工房の設立によって、個人経営が競争による損害をうけるのでないかといった心配がささやかれているが、競争の危険は決して生じないだろう。そうした工房の目的はまったく反対の方向にあるのだ。それらは、手工作や工業の全体の手助けをしようとするものであり、決して邪魔しようとするものではないのだ。それらは、手工家や工業労働者の後継者がより高度の専門教育を受ける適切な場を形成しようとするものなのである。それらは、教職員としての個々人の招聘や、相関的な作業・教育共同体の形成を通して、様々な境界をこえて広く影響し、しかも、その精神的影響によって容認されるような精神的環境を形成しようとするものなのだ。しかしそれらは、とりわけひな型を創造し、それによって、仕事と形態の両面で格別なすぐれた製品を達成しようとするものであり、こうして、生産的となった手工作全体と工業に役立つ

注文が、外国から国内へ流れ込んでくるのである。

しかし、われわれは、そうした国立工房がいずれ数年後に設立されるまで、時間を浪費すべきではなかろう。芸術と手工作の実践を推進するために、現場の企業と現存の美術教育機関とのあいだの相互交流を直ちにはかるべきである。たとえば、次のような方法でよい。たとえば家具師、金具屋、ペンキ屋など、彼らの仕事の製品を通して名声を得る現場の私企業は、美術学校と結ぶ教育契約のもとに、純粋な技術的・手工的な面と、実践的経営とを目標さなければならぬ学校の生徒たちに対し、さほど短期ではない手工作の教育課程を開講することに同意しなければならない。もちろん、そのような教育は正規の修業期間の代替とみなすことはできないものの、国立学校が、のちに基礎的な手工教育を履修しなければならない工房へ変わるまでの、移行措置とみなすことができよう。逆に、手工親方および工場主は、手工作にはすぐれているものの、形態の発展の可能性については、ほとんど何らの造詣もない従業員を、彼らの企業から現存の美術学校へ一とりわけ美術工芸学校が問題となるが—おくりこみ、これらの学校との継続的な共同作業の道をひらかなければならない。職人は、製品素材を自分で工房から学校へもってくる。しかも、新しいか、あるいは、ただ改良が必要な製品のための図案の委託にすぎない場合であっても、企業において、明らかに実現できる特定の委託形式でもってくるのである。職人は、いまや手ほどきを受けながら、学校の図案教室において、細部に至るまで形態の素描を徹底的に研究し、親方の工房への注文に応じて、その都度製作の場にもどるのである。同時に、学校の教育親方は、個人的に工房や工場を訪れ、図案の製作を注意深く追い、そして当該の技術分野、すなわち機械や道具の特徴、さらには加工されるべき素材の特徴について、たえず学ぶのである。教育親方は、新しい技術研究に刺激をあたえ、企業の指導者とたえず接触をたもつ。こうしたことのために生じる経費は、企業の指導者が、教育のために送り出す職人への、わずかな授業料に限るものとする。そのかわり、価値ある図案を直接占有することになる。技術・商業・形式上のさまざまな懸念は、図案の製作中や生産にとりかかる前に、生産者と図案家との緊密な共同作業によって取り除かれるだろう。したがって、図案は不適当なものとして破棄される危険はないのだ。なぜなら、商人も技術者も、図案の成立に参加するからであり、そしていまや、自らその図案を出来る限り立派に製作し、商品のすばらしい売れゆきを配慮することあらゆる関心を払っているからである。われわれの経済不況を一べつすれば、工場主に対するこうした要求は、容易にかなえられないものの、勇気とやる気があれば、われわれはやがて序々に目的を達成するであろう。しばしば驚くほどの手工活動の技倆をもちあわせた、多くの中間的な芸術的才能の持ち主たちが、国民の不可欠な就業の途上で確保されるし、しかもこれまでのように、無益な芸術訓練を強いられないでもよいのだ。だが、数少ないすぐれた自由芸術家には、彼らが寄って立つ手工の基礎と、就業国民に向けて架けわたされる橋、すなわち際限のない孤立化のなかで、今日、彼らに欠けた待望の連体性とがあたえられる。なぜなら、今日、彼らは国民に支持されていないからだ。

われわれは混沌のなかを浮遊しており、共通の精神軸も、生きた宗教も、芸術すらももちあわせていない。なぜなら、芸術に精神的基盤が欠けているからなのだ。だから、これ以上、粗悪な日常品や使用品と芸術とを結合しようとすることはとんでもないうぬぼれなのだ。今日、それらは芸術とは何ら関わりないものである。純粋な芸術は、神聖かつまれな存在であり、無目的なものである。それはもっとも孤独な道をはるか前方へ進んでおり、忘我の絶頂においてのみ生まれ、理解されるものなのだ。われわれが築こうとした目的芸術というスローガンは多

くの禍をひき起こした。ゴシック教会の塔は全く無目的なものではないだろうか？。塔は鐘を載せている。だが、その台であるためには、なるほど石造の多数の像、小尖塔、星花などは必要ないのである。そうした塔は、それが建てられたときは、まさにこのような無目的の、美へ奉仕する作品に気持を表わした国民全体の、精神運動や宗教的憧憬の純粹な表現なのであった。われわれの分裂した時代には、もはやこうした強固な共通感情は見あたらないし、優れた芸術は長いあいだ、孤立しほとんど理解されないわずかな人々のみが手がけ関知するものとなった。それゆえ、われわれは、単に合目的に形良く造られさえすればよい日常的な使用物には、決して芸術をうんぬんしないようにし、われわれが再び精神的統一を獲得するまでは、合目的性から離れて、日常や趣味から解放された暮らしを送るわずかな優れた製品に対してのみ、芸術という言葉は取っておく方がよいだろう。こうした製品を判断する場合に、われわれがどれほど慎重であったとしても、それらは同時代の平均的な人々には決して理解されないだろう。現代の高慢さの結果、芸術家の作品ですらも、とりわけ表面的に評価されてしまう。人は、それぞれの専門職には、それ特有の専門知識を認めながら、芸術については、ほとんどの者が、たとえ芸術に関する最小限の専門知識すらもたないとしても口にしてはいる。そして真の芸術家が、未熟な市民の眼をびっくりさせるような未来を予感させる作品へ到達するまでに、どれほど果てしなく長い、思索的、形式的作業の道のりを通り抜けなければならないかを忘れてるのである。芸術作品に対するこうした高慢さは、ひとつには、優れた芸術と、本来各人が勝手に判断しうる日常的な使用物とを混ぜこぜにした結果なのである。しかし、形式と趣味との充足は一般に、下から達成されうるものではなく、上からのみできるものである。事実、それは組織化されないのである。われわれは失敗をおかしてきた。戦前、われわれはあべこべなことをしようとし、芸術を組織によって後方から一般化しようとした。われわれは、灰ざらやジョッキを“芸術的に”造形し、漸次、最小のものから大きな芸術作品、すなわちあらゆる造形活動の最終目標としての、全てを包括する大建築へ進もうとした。全てが冷静に計算された組織によっておこなわれた。これが高慢さであり、この点でわれわれは失敗したのだ。そしていま逆に、われわれは、おそらくはさほど遠くない未来に、最終的には、国民の大芸術作品、すなわち未来のカテドラルのなかにその象徴を見出すような偉大な精神的理念が再び凝縮するまで待たなければならないだろう。このとき、この作品は、われわれの意識的な手助けなしに、日常生活の最小の物に至るまで、その輝を反射するであろう。したがって、これまでのような過程とは逆なのである。もちろん、われわれは、これまでのような過程にもはや出合うことはないだろうが、しかしわれわれは、おそらく、こうした世界変革の時代に生まれた、そのような共通の新しい世界思想の先駆者であり、最初の担い手であろう。(終り)